



『御殿山を汚す夷狄の館……
英国公使館を焼き打ちする』

文久2年12月12日—

品川・御殿山に建設中の英国公使館が炎上した。

犯人は高杉晋作ら十二人の若き長州藩士たち。

狂拳に至るそれぞれの「志」と「青春」を描く幕末青春活劇

SAMPLE



東村山製作所

攘夷テロリズム じょういてりりずむ

2011年11月15日 発行

著 者 阿部マコト

発行所 東村山製作所

<http://chosyu.abe-makoto.com/>

mail@abe-makoto.com

本文の無断転載・複製を禁ず。

© Higashimurayama Works 2011

サポートコード

1234567890



この度は「攘夷テロリズム」をご購入いただき、誠にありがとうございます。この作品は某携帯コミックサイトで連載させていただく予定でしたが、諸事情により連載を辞退させていただくことになりました。

お蔵入りにするのは勿体ないので、電子書籍の形で発表することにしました。

オムニバス形式で十二話位で考えていたのですが、ひとまず今回収録した二話で完結となります。

本当はもう少し先まで描きたかったので残念です。

話は最後までできているので、乙女ゲームの形にリメイクしようと考えています。

物語は幕末、文久二年の末からはじまります。

黒船来航から九年がたち、日本がいよいよ幕末の混乱期に入ろうとしていた時代です。

作中で名前が出ている人物は全て実在の人物で、高杉晋作・久坂玄瑞・志道聞多・大和彌八郎などの若手長州藩士を描いています。

日本史の教科書に出て来る子も何人かいるのでご存知の方もいらっしゃるかもしれません。

彼らが「幕末の偉人」になるほんのちよつと前のお話です。

長州藩は今の山口県にありました。彼らは長州藩主の参勤交代の同行や、学業・仕事など、各々の事情で長州から江戸にやって来ました。

高杉晋作もその一人ですが、この時期はプチ家出(脱藩)が藩にバレ、強制連行されて謹慎をくらっている最中です。

家出に謹慎、現代の駄目な高校生のよう思わず笑ってしまいました。

当時の彼らの日記・手紙を読んでも「本当にこれが史実なの？」と突っ込みたくなるエピソードが沢山あります。

教科書に載っているつまらない年表の裏には、等身大の二十代男子の半端なく面白い日常がありました。

それを描いてみたい！みんなに長州藩の事を知って好きになってほしい！と思ったのが執筆のきっかけです。

私はいま二十八歳で、当時の志道聞多・大和彌八郎と同じ歳です。

やがて「幕末の偉人」になる自分と同じ年頃の男の子たち。

彼らは何を感じ、どんな青春を過ごし、やがて時代の狂乱に身を投じるのか。

読んだ後、少しでも長州藩に興味を持っていたらうれしいです。それでは、「攘夷テロリズム」はじまりはじまり……

二〇一一年十二月







見ろ！
あの炎は

亡師の御魂の
冬を溶かし

世に
春を呼ぶ魁

そう言って
笑ったきみは

炎を煽り
翔け抜ける春風

ぼくらは
未熟な小さな種を
胸に抱いて
それに乗る

ぼくらの放つ

攘夷の炎だ！

きみとなら
どこまでも
翔んで行ける
ような気がした

まるで……

ああ

灰が……

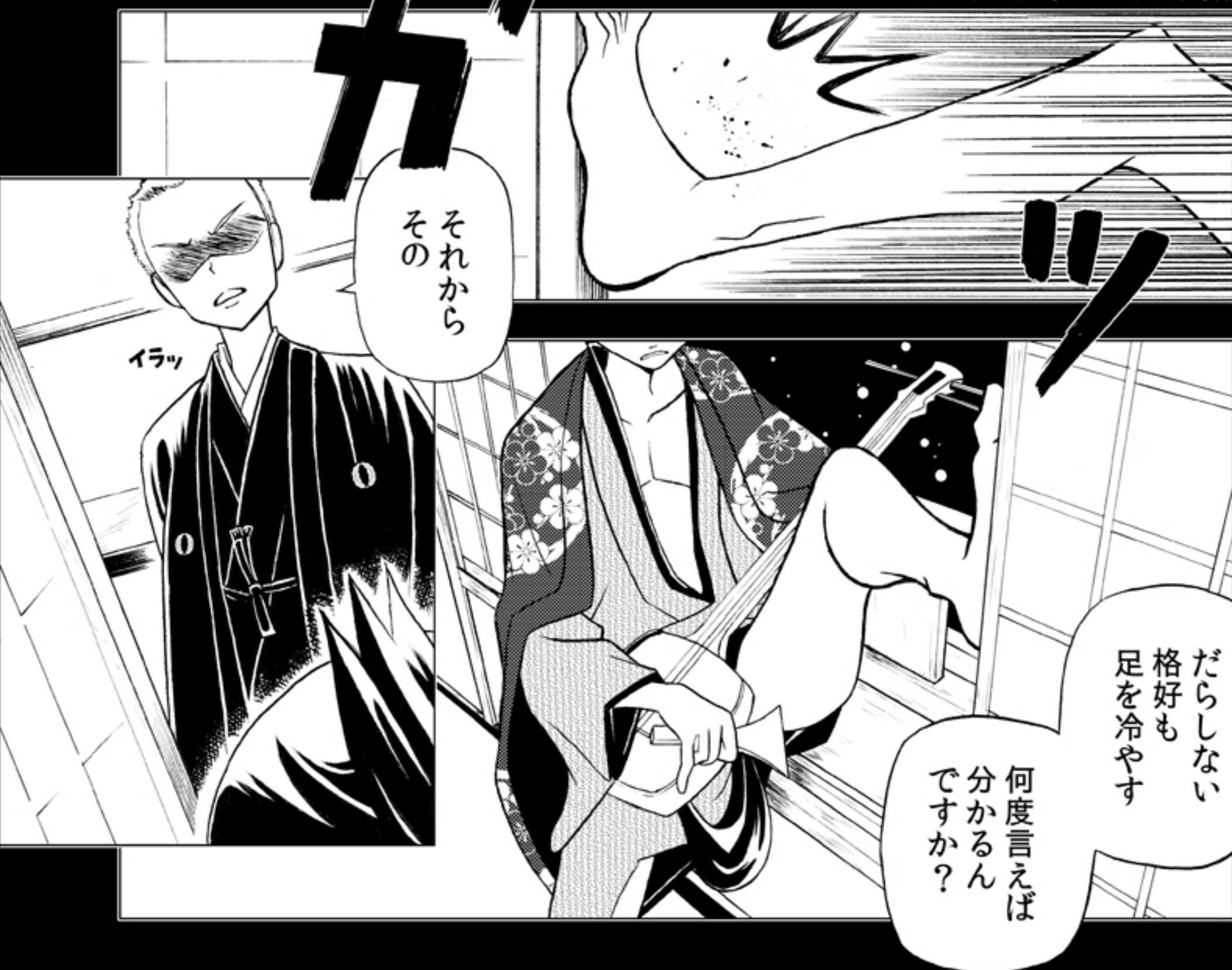
文久二年
冬のお話

三千世界の
鳥を殺し





※文久2年12月上旬…1863年1月下旬頃。



※暢夫…高杉晋作の字(あざな)。字とは名前と敬称を兼ねた別名で、親しい間柄で呼び名として使う事がある。



